

「永登浦都市産業宣教会」を再び訪問して —2017.8 第11回日韓URM協議会—

『むくげ通信』284号(2017.9.24)

飛田雄一



2017.8.28-29 第11回日韓URM協議会

URMは、Urban Rural Mission、都市農村宣教のこと。日本と韓国の関係者が行っている。第1回協議会は、1978年5月15日から19日、韓国水原アカデミーハウス「明日のための家」で開かれた。私も參加した。これが初めての韓国訪問だった。(『むくげ通信』48号~51号参照。『現場を歩く 現場を綴る—日本・コリア・キリスト教』に再録。)

当時、韓国では東一紡績、YH紡績などの労働争議が活発に展開されており、それにキリスト教が大きく関わっていた。訪韓前に大阪の日本側メンバーにビザがでず、東京大使館、神戸領事館関係のメンバーだけで訪韓した。韓国当局の圧力を受けながらの協議会で、帰国のときには一部のメンバーが金浦空港で一時拘束されるという事件が起こっている。観光目的で入国したのに会議に参加した、不穏印刷物を所持しそれを持ち出そうとしたというのがその理由であった。

第2回目以降は、韓国と日本で相互に開催することになり、途中に中断もあったが以下のように開催されてきた。

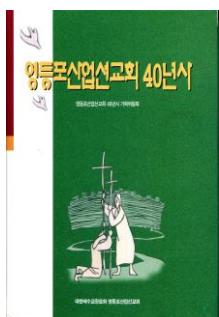
第2回、1981年、京都（関西セミナーハウス）、第3回、1983年、ソウル、第4回、1998年、京都（関西セミナーハウス）、第5回、2001年、韓国慶州、第6回、2003年、京都（関西セミナーハウス）、第7回、2005年、韓国京畿道、第8回、2008年、滋賀（同志社びわこリトリートセンター）、第9回、2010年、韓国済州島、第10回、2013年、京都（関西セミナーハウス）。そして今回第11回目の協議会がソウルで開催されたのである。主題は、「不平等と差別を超える差別のない社会に向けた韓日教会の役割」、会場はキリスト教会館と聖公会ソウル大聖堂だった。参加者は日本側20名、韓国側22名。

8/27（日）、夜遅くソウルに到着し、翌8/28（月）

と29（火）は、主題講演、発表、聖書研究などが行われた。この11回の協議会すべてに参加したのが私だけだったことから、私も「日韓URM協議会の歴史と意義」をテーマに発表した。私は、「生き字引」ないしは「生きた化石」のような扱いだった。

発表は多岐にわたっており、内容を詳しく報告できないが、「あ、そうか」と思ったことをひとつだけ紹介する。私には珍しく（？）聖書解釈に関する事だ。

日本側発題の大谷隆夫牧師（釜ヶ崎で活動）と韓国側発題のホン・ウンギョンさん（永登浦産業宣教会で活動）から同じ聖書の個所「ブドウ園労働者（マタイによる福音書20章1~16節）」が話題として提供された。（以下にはりつけは、『永登浦産業宣教会40年誌』1998.10、A5、672頁、貸出可）



この話は、イエスのたとえ話の中でもよく知られた話で、ブドウ園の主人が労働者募集に街にでかける。朝早くに数名、午前9時に数名という風に雇い、午後にも何度もでかけてその度に労働者を雇ってくる。夕方にも雇った。日当を遅く来たものから順番に同じ1デナリオンを支払った。夕方来て1時間だけ働いた人にも朝早くから働いた人も同じ1デナリオンだった。朝早くから働いた人は当然のように不平を言ったが、主人は「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと1デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか」と言ったのである。そしてその聖書の個所のオチは「後の者が先になり、先の者が後になる」だ。この部分だけが特に印象に残っていた箇所だ。

が、大谷牧師は、「『格差社会』の現実から考えると、『絵空事』の話のように思えます。しかしながら、『共生社会』という観点から考えると、『絵空事』どころか、まさに、具体的に実践しなければならない課題をつけているたとえ話のように思います」という。

一方、ホン・ウンギョンさんは、次のように言う。

『その最後の者にも』同じ賃金を与えた話を読むと基本所得のことが浮かび上がる。この御言葉は明らかに基本所得の保障がブドウ園の主人（神）の意図で

あることを力説している。／基本所得とはなにか？能力があろうがなかろうが、女性であろうが男性であろうが、障がいをもつていようが非障がい者であろうが、さらには仕事をたくさんしていようが少なくしていようが、人間は誰も人間らしい暮らしを営むべき権利があり、これに見合う所得が保障されなければならないということである。／これは非常に聖書的な論理であり、すでに多くの神学者たちがこの部分に対する主張をしているものと理解している。これからも神学者が基本所得に対する聖書的根拠により多くの研究をして教会内に広げてくれることを期待する」

私は韓国の教会ではこのように理解されているのかと意地悪な質問をしたが、「ここにいる韓国の牧師たちはこのように理解している」とのことだった。日本の教会ではどうなのだろうか。



8/30 (水) は、フィールドワークにでかけた。(左、宣教会入口の筆者) 最初に訪問したのが永登浦産業宣教会。ホン・ウンギョ

ンさんが働いているところだ。ここには、1978年に訪問した。そのときは、まさに労働争議の真っ最中でスタッフが超多忙、オーストラリアからの宣教師・ラベンダーさんが案内してくれださった。当時の若い私の写真が残っている。(中央、右は土肥隆一さん)



永登浦産業宣教会は、1957年大韓イエス長老教会宣教70周年記念事業として産業伝道委員会が作られた所から始まっている。1964年、趙之松牧師が永登浦地区産業伝道専任牧師となり、翌1965年に「永登浦教会産業伝道会」が組織された。その後、現在までの記録を冊子から抜粋すると以下のようになる。

「労働組合による都市産業宣教(1968年～1972年10月維新以前)／小グループによる都市産業宣教(1972年10月維新以後～1977年)／都市産業宣教に対する弾圧と守護およびキリスト労働者運動出帆(1978年～1987年)／労働運動支援体、キリスト教労働運動体としての都市産業宣教(1988年～1995年)／新自由主義、両極化を乗り越えるための労働と協同共同体運動(1996年～2013年)／生命サルリム(生き方)宣教運動としての都市産業宣教(2014年～現在)（「永登浦産業宣教会の歴史とビジョン」B5、8枚、ハングル、当日いただいたコピーより)」

午後には、日本大使館前での水曜集会、光化門前の非正規労働者の座り込み闘争に参加した。更に一日滞在した私は足立龍枝さんお勧めのソウル歴史博物館を訪ねた。内容の濃い展示で本当に勧めだ。



永登浦産業宣教会のお店、1989～有機農業専門店となる



労働運動の搖籃、民主化運動史跡地



2017.8.30、ソウル大使館前水曜集会、アピールする土井佳子さんと通訳の許伯基さん



光化門前の非正規労働者の座り込み闘争



ソウル歴史博物館、国境を越えて境界を越えて、下展示の一部

移住と疎通の道

西ベルリンは、分割国家出身の移住労働者である韓国人女性看護師にとって、特別な経験を与える都市であった。社会主義国家の東ドイツの中央に位置し、分割の象徴である。それゆえ、そこへ行くということは、反共イデオロギーの影響を受けた彼女たち自身はもちろん、その家族にも不安を抱かせた。しかし、当時のベルリンは、西ドイツの都市としてドイツ政府によって積極的に居住が推奨され、働き口も多かった。また、ドイツの若い世代が、旧世代の権威と旧態に抗議した68年運動の中心地でもあった。ところが、1977年から78年にかけて、外国人雇用の中断を宣言した西ドイツで各機関が女性看護師を解雇し、帰国するよう働きかけた。それに抗議する強制送還反対運動は、ベルリンでも活発に展開された。西ベルリンに移住した女性たちは、自らの視点を切り替え、境界越しに世界を見つめ、積極的に生きることを向き合っていた。